



2007年4月発行

聖霊の執り成し

「同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないめきをもって執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。」

(ローマの信徒への手紙 8章 26～27節)

いくら強がってみても、人間は弱く、脆い生き物です。平穏な時には、大言壮語できても、いざ困難が迫ると、直ぐに音を上げ、愚痴をこぼし、意味のない後悔を繰り返し、まるで凡ては神の責任でもあるかのように、神にさえ文句を言い出すのです。しかしそんな私たちに、神は、愛想を尽かしたり、叱咤するのではなく、聖霊を送って、助けてくださる、と言うのです。

此処で“助ける”と訳されている原語は、“共に”と、“代わって”と、“受け取る”、と言う三つの言葉から出来ている合成語です。それは、私たちと“共に”働き、私たちに“代わって”担い、私たちの重荷を“受け取って”、その荷を軽くしてくださる、と言う意味で、これこそが私たちに対する、聖霊の助けなのです。「聖霊は、私たちの弱さにとっては重荷と感ぜられる荷の重さを、御自身に引き受けられ、単に私を助け、救いをもたらすだけでなく、正に、私たちと一緒に、この荷を負うようにして、私たちにとって軽いものにしてくださるのです」(カルヴァン)。

私たちの弱さが、最も露わになるのは、最早祈れなくなる、と言う瞬間です。呆然自失と言うこともありますし、慌てふためくと言うこともあります。しかしそれだけではなく、果たしてこんな祈りをしていいのか、とか、こんな罪深いことをしていいながら、今更こんな虫のいいことを祈っていいものか、とか、自分の祈りに迷いが生じ、挙句の果て、祈れ

なくなってしまう、と言うこともあるのではないのでしょうか。それでも、祈る以外に万策尽きるとき、私たちは呻く以外になくなります。呻きには言葉がないからと言って、意味がない訳ではなく、それは人間の最も深い思いの発露であって、此れ程雄弁に心の内を語るものは外にないのです。そんな、呻く以外何も出来なくなった私たちと、実は聖霊が一つになって、聖霊も亦、私たちと一緒に呻きながら、私たちの本当の気持ちを父なる神に届けてくださるのです。私たちと呻きを共にしつつ、執り成してくださる聖霊は、あくまでも自らを隠し、慎ましく働かれるので、私たちはそれに気付かず、自分一人が孤独に耐え、呻いているのだと、そう考えるのですが、実はそうではないのです。主イエスは、世を去られる直前、弟子たちに、「あなたがたを捨ててて孤児とはしない」(ヨハネ 14:18)、と言い、自分に代わる別の弁護者を送る、と約束していただきました。弁護者とは聖霊のことで、口語訳聖書では、“助け主”、と訳されていました。私たちは最早、どんな状況に立ち至ろうと、孤児のように孤独ではないのです。呻く外はない、弱さのどん底にある時にも、助け主でいます聖霊は、呻きの中にも共にいて、自らも呻き、隠された私たちの本当の思いを、確実に、父なる神の御許へ届けてくださるのです。

確かに聖霊は、私たちと呻きを共にし、一つの呻きを、私たちと同霊同体となって呻いてくださるのですが、しかし一体と成るとは言っても、合体して、私たちがまるで霊に憑かれたように、神がかかるわけではないのです。何処までも私たちは私たち、聖霊は聖霊であって、この区別が曖昧にされることはないのです。聖霊は、単なる神の超越的なパワー、と言うようなものではなく、父なる神、子なる神と同様、神なのです。それは内なる神として、私たちの内にあって、神の愛の御業を行なってください。

三輪恭嗣

(2007年 1月 7日の礼拝説教より)